

近現代文学における「食・もてなし・家族」 —夏目漱石・村上春樹の場合—

范 淑 文*

1. はじめに

多田道太郎は食文化について次のような見解を示している。

食というのは一種の暴力ではないか。攻撃性といってもいいかもしれません。植物なり動物なりをぶった切って、ぐしゃぐしゃにして、それだけでは足りないで腹の中へ入れて咀嚼して、もう無茶苦茶にして自分の中に取り入れてしまうわけです。(中略) ある小説を読んだときに私がショックを受けたのは、その小説に出てくる女の人が、人前で食事をするのは非常に恥ずかしいというんです。セックスはぜんぜん恥ずかしくない。ところが食というのは非常に恥ずかしいというわけです。

(中略) ある動物、ある人間は人の前で食べることをしないで、こそこそ隠れて食べます。

¹ (下線引用者、以下同じ)

上掲の引用文に従えば、食とは「一種の暴力」であり、「攻撃性」がある行為である。氏は、「女の人が、人前で食事をするのは非常に恥ずかしい」とある小説の一節に示唆され、「ある動物、ある人間は人の前で食べることをしないで、こそこそ隠れて食べます」という、人間の一面に気づいている。氏の読んだ小説がどの作品であったかは知る術がないが、文学作品に食がどのように盛り込まれ、登場人物が食を如何に扱っているか、更に食の一環であるもてなしは登場人物の人間関係をどのように反映しているか、或は働きかけるのかな

どは実に興味深い問題である。

さて、もてなしとは何を指しているだろうか。『大辞林』には、「持て成し」と表示され、「①客に対する扱い。待遇。②客に出ず御馳走。接待。③人や物事に対する振る舞い方。態度。④物事に対する扱い。とりはからい。処置。」²と、四つの意味が並べられている。この解釈によれば、広義では非家族のみならず、すべての人間がその対象になり、また人間だけでなく、物もその範囲内の対象とされるが、狭義的に考えれば、人間、非家族に限られると捉えられよう。つまり、狭義的に考えた場合、家族に対する扱いや御馳走などはもてなしとは言い難いことになろう。本発表では狭義的な意味で、もてなしを捉え、近現代文学に盛り込まれているもてなしを食と共に、それぞれの機能などを考察していく。食ももてなしも家族関係や個の社会的位置づけにつながる可能性は十分に考えられる。小稿では、漱石の作品の中で世間に背を向けている夫婦の物語『門』、と漱石と共に「国民作家」³と評価される村上春樹の家族色が強い『国境の南、太陽の西』(以下『国境の南』と略称する)との両作品を中心に、食ともてなしがどのように作品に盛り込まれているか、またそれらの考察を通してその場に立ち会う人物の内面、それぞれの人間関係などの解明を試みている。

2. 『門』にみる食・もてなし

過去、親友である安井への「不義」で親戚と疎遠となり、世間に背を向けるような姿勢を構えている宗助夫婦は、「山の中にある心を抱いて、都会

* 台湾大学

に住んでゐる「仲の好い夫婦」(十四の一)だと語られている。しかし世間とは殆んど関わらずにいた二人の生活に、大家、坂井家の泥棒事件や宗助の弟の入居などで、少し変化がおとずれる。もてなしを受けたり日常の食事の風景が変わったりするのである。中でも、弟小六がメンバーに加わった食卓の光景、及び宗助が坂井からの誘いで受けたもてなしは最も注目に値する場面であろう。

2.1 小六の入居によって変わった食卓

(1) 嫂の後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼をつけて、(中略)「御茶なら沢山です」と小六が云つた。(中略)「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。(中略)「ぢや御菓子も廃しにしませよう。それよりか、今日は兄さんは何うしました」と聞いた。(中略)「ぢや晩に何か御馳走なさい」(中略)小六は黙つて嫂の顔を見てゐた。彼は実際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつたのである。(一の三)

(2) 「小六が来たから、何か御馳走でもするが好い」と云ひ付けた。細君は、忙がしさうに台所の障子を明け放した儘出て来て、座敷の入口に立つてゐたが、(二の三)(中略)御櫃の蓋を開けて、夫の飯を盛りながら、

「兄さんも随分呑気ね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護する様に云つた。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言の弁解もなく食事を始める。小六も正式に箸を取り上げた。

(中略)三人は飯の済むまで無邪気に長閑な話をつづけた。(三の二)(中略)台所から清が出て来て、食ひ散らした皿小鉢を食卓ごと引いて行つた後で、御米も茶を入れ替へるために、次の間へ立つたから、兄弟は差向ひになつた。(中略)しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、又出て来た。(三の三)

上掲した引用文はいずれもこれまで通り叔母のところへ厄介になっている小六が、今後の自分の学費や生活費などの心配ごとを、兄が叔母に交渉してくれたかどうかを確かめるために宗助夫婦の家に訪れている場面である。余裕のないうちであるが、宗助は「何か御馳走でもするが好い」と御米に勧めたり、御米の方も御茶や御菓子などを出したりして気を使っているのがうかがえるが、小六はまだ引っ越していない、つまり、まだ客という時点では、御米にはそれほど不自由の気配は見えない。とほいうものの、ここでは嫂が折角御菓子を用意して気を遣っているにもかかわらず、「実際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつた」という小六の様子はせつからで、兄が自分のために叔母に交渉してくれたかなど自分のことしか頭にない、わがままな性格を物語っているのではなからうか。

「其晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪つて来て、それを座敷の縁に敷いて、其上に御米と並んで涼みながら、小六の事を話した。」(四の八)という描写からも夫としての宗助の心を御米は感じ取っているはずであろう。その宗助の愛情への応えであろうか、小六の世話を引き受けようという御米の提案で、いよいよ小六が引っ越してくる。しかも、家の中で最も日当たりのいい六畳一御米の鏡台などが置いてあつた部屋一を小六のために空け渡したのである。こうして小六が家族の一員になり、御米の日常生活一食事一に変化をもたらすのである。

宗助と一所になつて以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫より外になかつた。夫の留守の時は、たゞ独り箸を執るのが多年の習慣であつた。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合はせながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異な経験であつた。(中略)「小六さん、下宿は御馳走があつて」

こんな質問に逢ふと、小六は下宿から遊びに来た時分の様に、淡泊な遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。已を得ず、

「なに左うでもありません」ぐらゐにして置くと、其語気がからりと澄んでゐないので、御米の方では、自分の待遇が悪い所為かと解釈する事もあつた。それが又無言の間に、小六の頭に映る事もあつた。(八の二)

小六が引っ越してから間もない頃の二人の対応の場面である。それまでは、宗助以外の人、しかも異性と一緒に食事を取った経験など御米にはなかった。御米にとっては「一種異な経験」と感じるのも無理はなかろう。あまり生活の余裕のないこの家での食事は粗末ではないかと気を使ったつもりでの御米の「下宿は御馳走があつて」という質問に対して、「なに左うでもありません」と、小六は淡々と答えた。その結果「自分の待遇が悪い」のではないかと、御米が余計に自分を責める羽目になってしまったのである。にもかかわらず、仕事が一段落つき、火鉢の前で「手を翳し」ている時、「兄さんは来年になると月給が上がるんでせう」と小六が唐突に御米に聞いた。突然の質問に御米は答えずに戸惑っていた。そして、「兄さんは増俸の事をまだ貴方に話さないんですか」とまた小六に聞かれた御米は、「いゝえ、些とも」と答えた。折角持ち出された話題であつたが、緊張した関係を和らげるような話題として機能せず、如何にすれば自分の学費や生活費の問題が改善されるのかという小六の自己中心が明らかになっているとしか言い様がない。そのような好ましくない接触や気遣いで、御米はとうとう体調を崩してしまい、それまでのように「避難所」のような例の六畳で休むことができず、仕方なく座敷へ「床を敷いて」寝込んでしまった。

つまり、小六という「外来者」によって、それまでの夫婦だけの食卓が変わつたのである。否、というより、昼間、この「外来者」と差し向かいで

食事を取らざるを得ない、御米の食卓⁴という空間がすっかり変わってしまった、といった方が適切であろう。その空間一昼間自分一人の世界一が変えられてしまったのである。その世界異変への拒絶反応であろうか、とうとうある日体調が崩れた御米はお昼になっていても床を離れなかったため、小六は「たつた一人大きな食卓を専領して」昼ご飯を食べた。

2.2 坂井のもてなし

世間に背を向けて生活をしている宗助夫婦は、友達とも親戚とも殆んど付き合わない。そのように交際が最も嫌いである宗助は、交際の得意な大家、坂井のうちには泥棒事件で時々訪れたり、持て成されたりするようになった。

(1) 木皿の様な菓子皿のようなものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを言はずに退がつた。木皿の上には護謨毬ほどの大きな田舎饅頭が一つ載せてあつた。それに普通の倍以上もあらうと思はれる楊枝が添へてあつた。(中略)主人は箸とも楊枝とも片の付かないもので、無雑作に饅頭を割つて、むしや／＼食ひ始めた。宗助は顰に倣つた。(十六の三)

(2) 「何なら御紹介ませう。丁度明後日の晩呼んで飯を食はせる事になつてゐるから。

(中略)

「御出になるのは御令弟丈ですか」

「いや外に一人弟の友達で向から一所に来たものが、来る筈になつてゐます。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、(中略)宗助は其夜蒼い顔をして坂井の門を出た。

(十六の五)

(1) は正月の七日に坂井の家族が外出している時に、宗助が招かれている場面である。二人がか

なり親しくなってきた時分であり、いつもの座敷の代りに、「僕の洞窟で、面倒になると此所へ避難するんです」という主人のお城のような存在の書齋で接待されているのである。接待とはいえ、そこには御菓子やそれを盛る皿、また主人の食べ方などから、宗助をかなりの親友と思い、気取らず振舞っている、その豪快さや和やかな空気が感じられる。そのような外交好きのように見える坂井にも家族などから「避難」したい時があり、しかも隣人の宗助とその場所で一時を過すということから、宗助はここで外部でありながら、自らずつと隔絶してきた外部とは異なり、安らかにいられる場—子供がいない御米との場とは違う場—に暫し身を置くことができたのである。

しかし、その後、坂井の次の誘いでその忘れられていた暗闇の世界が再び宗助の前に突きつけられた。それが(2)の引用文である。坂井の弟が蒙古から帰ってきている。「冒険者」と称されるその弟と満洲から帰ってきた安井という友達が、明後日坂井のうちで食事をする約束となっている。そこに宗助も誘われたのである。安井というのは実は、宗助夫婦が裏切った友人の名前で、彼はその後、満洲に渡ったという噂が耳に入っていた。ここ数年間タブーのようなこの名前を聞いた瞬間、宗助は「蒼い顔をして」、その晩急いで坂井家を出た。その「もてなし」—ずつと避けていた人も同席のもてなし—を避けたく、会社を一週間も休み、禅寺に籠った。安井という人が同席する、この「もてなし」は宗助にとっては唯一の家族である御米との関係が脅かされ、二人の家庭が崩壊される恐れがある席上であり、坂井ではなく語り手によって破壊力⁵を持っている場のように仕組まれているとも捉えることができよう。禅寺に一週間も泊まっていたにもかかわらず、全然変わっていない宗助の心の内は、実は、その仕組みがなくなるのを遠くで待っていたに過ぎなかったのである。

3. 『国境の南』にみる食・もてなし

家族を中心に描かれたものは村上春樹の作品では珍しく、『国境の南』はその類の一つである。また家族を囲んで食事をする場面が少ないのも特徴の一つと言えよう。殊に、『国境の南』の中で主人公「ハジメ」の妻の父親が登場し、珍しく「ハジメ」を食事に誘う場面は意味深い箇所であろう。

義父はじつと僕の顔を見ていた。

「三十七といえば遊びたい盛りだな」と彼は言った。「仕事もばりばりできるし、自信もついてくる。だから女もけっこう向こうから寄ってくる。違うか？」(中略)「でもな、遊ぶのはいいが遊ぶ相手だけはきちんと選んだ方がいいぞ。うっかり選び方を間違えると、人生を踏み誤ることになる。(後略)」(P183.184)

二十数年ぶりに再会した初恋の島本さんに頼まれ、一日しか生きなかつた赤ちゃんの遺灰を川に流すために二人で石川県に行ったものの、天候不良で飛行機が欠航、家に帰ったのは翌日の朝になってしまった。しかし、妻である有紀子に嘘を吐いた。その四日後、義父—有紀子の父親—に食事に誘われ、赤坂の鰻屋で鰻を食べ、酒も大分飲んだ後のシーンである。勿論、義父は事業のことで誘ったのであろうが、結果としては初恋の島本さんと一晩を過した後だっただけに、「遊びたい盛り」の年、「遊ぶのはいいが遊ぶ相手だけはきちんと選んだ方がいいぞ」という言葉を聞かされたときには、まるで島本さんへの気持ちが遊びでない、見透かされたように聞こえた。義父は更に話を続け、子供のなかで有紀子が一番可愛がっている子であることや、昔ちょっとした男女関係で自殺を図ったことがあるという話まで聞かせてくれた。

アドバイスであると共に、脅かしとも捉えられそうな義父の話の聞きかされた「僕」は家に帰ったら昼間にもかかわらず、有紀子を強く抱いた。後

ろめたさからなのか、暫くは有紀子と頻繁にセックスをした。ここで、そのもてなしが鰻だったということに興味深い。浮気に走っている「僕」にブレーキを掛けさせるほかに、娘との夫婦関係を深めてほしいとの意図で「僕」に精力をつけさせることを義父が企てた、という「もてなし」だったとも捉えられよう。義父の計らいが偶然か早速効果を見せた一場面である。

が、実は「もてなし」の本望は幽霊会社設立に必要な名義借用の依頼だったのである。その場では、疑問を抱いた「僕」は軽く反論する程度でどまった。その後、島本さんが暫く姿を消していた。そんなある日の午後、抑えきれない島本さんへの気持ちの反動であろうか、「僕」は有紀子に当たった。いつものように二人でうちで昼食を取っているとき、有紀子が父親から株売買の指示があったことを伝えると、「僕」は突如全く違う態度を見せ、義父からの指示に従わないと告げている。

「かまわない」と僕は言った。「手数料なんて払えばいいんだ。損をしてもかまわないよ。だからとにかく今日買ったぶんはそっくり全部売ってくれ」

有紀子はため息をついた。「あなた、この前お父さんと何かがあったの？何か変なことにかかったの、お父さんのことで」（中略）

「ねえ有紀子、正直言って僕はこういうのがだんだん嫌になってきたんだ」と僕は言った。

(P218)

「この前お父さんと何かがあったの？」というのは、前回赤坂の鰻屋で食事をしたことを指している。夫の態度が変わったことに有紀子はうすうすと気付いていた。父親と食事をしてから変わったのである。「僕はこういうのがだんだん嫌になってきたんだ」というのは、「僕は株で金なんか儲けたくない」というのを「だんだん嫌になってきた」の理由にしている、つまり人為的な操作という不法

な手段で株から暴利を得ることを拒絶している。それより、それを操作している義父—自分達を支配している金などの存在—に逆らおうと「僕」は試みているのである。この支配者のような存在の義父は金銭のみならず、家庭生活にも干渉していると「僕」は意識している。「僕」はそこから脱出を図りたかった。その第一歩として株売買の指示に反抗するといった意思表示を見せているのである。その続きに、「僕」の心理が次のように描かれている。

僕は突然何もかも有紀子に打ち明けてしまいたいという激しい衝動に駆られた。自分の心の中にあることを洗いざらい全部喋ってしまったらどんなに楽になるだろうと僕は思った。(後略) (P223)

以上のストーリーの展開から考えれば、義父の「もてなし」には娘への心配のほか、無意識に家父長制度にある父親の支配者の権威—子供の家庭生活への干渉—が再強調される意図が隠蔽されていたと考えられよう。一方、それ（その「もてなし」だけではなく）に感づいた「僕」はその束縛から逃れようと努力してみたが、その時点では「有紀子に今そんなことを打ち明けたところで、何の役にも立ちほししない。おそらく我々全員が不幸になるだけだ」と考え、家庭生活から逃れることをここでは諦めているのである。

4. 結び

以上、もてなしという装置に触れる際、中国の『桃花源記』で理想郷に入った外来者である漁師に、村人が富の象徴である鶏肉を振舞い、温かい気持ちで招くという場面が思い浮かぶ。漱石文学でも例えば『虞美人草』に描かれている、宗近一家が甲野を招いている笑い声が絶えず、明るくて温かい場面を挙げることができる。が、『門』に書

かれている「食」「もてなし」、及び村上春樹『国境の南』の「もてなし」はそのような単純な文字通りの意味にとどまらないのは上記の考察から明らかになっている。

『門』の「外来者」である小六が宗助夫婦と同居することでその食卓の雰囲気や意味も変り、更にその場での対応により、登場人物の性格を窺うことができる。粗末であるが、心温まる御米の心遣いより金銭にこだわる小六というキャラクターの設定は自己中心的な性格の反映と捉えることができよう。食卓を囲むというのは元来家族の絆の象徴でもあろうが、それを苦にするのはつまり家庭からの逃避の印しであろう⁶。この点は、村上春樹の『国境の南』にも類似場面を見出すことができる。「もてなし」、「食」には父親である父権、支配の意図がうかがえる。一方、支配される婿である「僕」は自分の意志—その時点では初恋の相手である島本さんに対する慕い、押さえ切れない恋一との葛藤に苛まれ、「僕」はその支配から脱出しようと図るのである。言い換えれば、「食」や「もてなし」は小説のなかで、家族の絆や関係を深める手段として発揮される一方、逆に破壊する力も潜んでいる—破壊のメカニズムとして仕組まれる—場合もある。となれば、冒頭で引用した「食」というのは一種の暴力で「攻撃性」のある、多田道太郎の指摘は『門』にも『国境の南』にも当て嵌まると言えよう。

註

- 1 多田道太郎「食事と文化」(『食の文化』昭和55.10.15 講談社 P9.11)
- 2 『大辞林』第二版 編者 松村明 1995.11.03 三省堂
- 3 「村上春樹と夏目漱石はともに「国民作家」というべき、近現代の日本を代表する人気と評価をもつ作家です。国民作家とは世代、性別を超えた幅広い層の読者によって支持されつづける作家のことです」(柴田勝二『村上春樹と夏目漱石』2011.7.10 祥伝社 P3)
- 4 「宗助が飯を食うそのちゃぶ台が、意味ありげに見えるのである。(中略) この小道具は、生きてうごいていてのではないか。」という多田道太郎説(多田道太郎『風俗学』1978.12.15 筑摩書房、P72)を踏まえ、前田愛は「夫婦さし向いで茶の間のちゃぶ台を囲む小市民的な「食卓の光景」は、おそらく御米と宗助が独立した自分

の部屋を所有している住み方と切りはなせない。中心に茶の間があり、宗助・御米・下女の部屋が三方に分肢しているという安定した居住空間の構造は、宗助夫婦の〈いま〉と〈ここ〉を見えないところで支えている。」と、空間論の視座より茶の間のちゃぶ台の位置づけや象徴を語っている。筆者は、この茶の間や食卓を宗助夫婦というより、御米にとっての意味がもっと大きいと捉えたい。(前田愛「山の手の奥」『漱石作品論集成【第七巻】』1991.10.10 赤井恵子・浅野洋編 桜楓社 P199)

5 出原隆俊は、「御米に再び二人だけの生活が戻るといふ展開は、御米にとっては子六が宗助の血を分けた実の弟だとしても、夫婦という固まりを脅かす〈他者〉が入り込み、やがて出て行ったという点で、宗助にとっての安井の場合と相似形となしている。(中略) 安井が再び日本を離れる事によって宗助が、子六が坂井家の書生になることによって御米が、少なくとも一時的に救済される。安定した閉じられた空間に他の領域から異分子が入り込んで混乱を引き起こすという、様々に応用できる図式が、二人それぞれに用意されていたといえよう。互いに相手の苦悩を知り得ないのである。」と語り、安井の宗助への脅かしを御米に対する小六の存在に置き換えることが出来ると見なしている。その苦悩が似ているかもしれないが、安井の登場の破壊力は夫婦二人の人生にかかるほど大きな問題を抱えているため、小六からの破壊力と同質のものとは考え難い。(出原隆俊「子六という〈他者〉——御米と火鉢——」『漱石研究』第9号 1997.11.20 翰林書房 P105)

6 芹沢俊介・小森陽一・石原千秋三人による「ゆらぎの家族」と題した対談のなかで、小森陽一は「明治という時代は(中略) 家と国民支配の一番末端の組織として位置付けることによって、非常に強力な上意下達式の社会システムを作った時代だったわけです。それに対する反発が、漱石の書いたすべての小説にあらわれている。」と語り、明治時代の知識人が背負っているうちの重荷やそこから逃れようとする気持ちが当時の作家、特に漱石に書かれていることを述べている。(芹沢俊介・小森陽一・石原千秋対談「ゆらぎの家族」(『漱石研究 特集 漱石と家族』第9号 1997.9 翰林書房 P7) / 一方、山下悦子は「老若男女ともに「個人主義」を発達し、各自が「個性」を重要視するようになれば、親子、夫婦、親類などの血縁を共同性も崩壊せざるを得ないというのが、この未来記の考え方だった。」とあるように、「個性」の発達によって家庭や家族が崩壊していく必然性を主張している。(山下悦子「夏目漱石と家族」『漱石研究 第9号 特集 漱石と家族』1997.11.20 翰林書房 P42)

テキスト

『漱石全集』第六巻 1994.5.9 岩波書店
村上春樹『国境の南、太陽の西』2009.6.19 講談社

参考文献

- 『大辞林』第二版 編者 松村明 1995.1103 三省堂
出原隆俊「小六という〈他者〉——御米と火鉢——」『漱石研究』第9号 1997.1120 翰林書房
芹沢俊介・小森陽一・石原千秋—対談「ゆらぎの家族」
『漱石研究 特集漱石と家族』第9号 1997.9 翰林書房
- 多田道太郎『風俗学』1978.12.15 筑摩書房、P72
多田道太郎「食事と文化」『食の文化』1980.10 講談社
前田愛「山の手の奥」『漱石作品論集成【第七卷】』1991.10
赤井恵子・浅野洋編 桜楓社
山下悦子「夏日漱石と家族」『漱石研究 第9号
1997.11.20 特集漱石と家族』翰林書房